

問題

次の文章は、齋藤孝氏の著書『コミュニケーション力』の一部です。この文章を読んで、あとの2つの設問に答えなさい。なお答えは、解答用紙に記入のこと。

『自分と対話し言葉を探す』

コミュニケーションが深まっているときは、相手とだけでなく、自分自身と対話している感覚がある。すぐに言語化できる事柄だけを話しているのでは、浅い会話になってしまうものだが、自分の中に埋もれている暗黙の知を掘り起こしながら対話することで、深い対話ができるのだ。自分の中に眠っているものを掘り起こすのは、精神的に労力を必要とする作業だ。

(中 略)

私はさまざまな領域の人と対話する機会がある。そんななかで、相手が言葉を探しているときが、よくある。私の投げかけた問いに対して、真剣に答えようとして、自分の感触にぴったりとした言葉を探している時間だ。逆に、そうした時間をまったく持たず、現在流れている会話の流れをひたすらつないでいるだけの会話もある。自分自身の経験全体に常に向き合い、相手からくる言葉の刺激をその経験全体に一度及ぼし、そこから出てくる感触を言葉にしてみる。この精神の作業は、慣れてくれば比較的短い時間でできるようになる。だが、語彙（ボキャブラリー）があまりに少ないと、微妙な感覚を言葉にしにくい。また、言葉をむやみにこねくり回してしまう場合は、自分の感触への問いかけが足りないケースである。

伝え合うのは意味である。その意味は心の感触とともにある。ちょうどいい言葉が見つかったときに、「そうそう、ちょうどその言葉がぴったりだ」という感触を得る。先に感触があるのだ。何となく捉えたその感触に手探りで言葉にしていく。言葉にしにくい「心の感触」をあきらめずに辛抱強く待ち続ける精神の強さが、深い対話をもたらす。

相手と話している文脈は維持しながらも、自分自身の経験値の深みに降りていく。この二つの作業を同時に行う能力が、対話力である。さらに、より高いレベルの対話力とは、相手の経験世界にまで思いを馳せることだ。相手が自分自身の経験を振り返り、微妙な心の感触を言葉にする作業を促し、それに付き添う。自分自身に向き合う習慣のない人もいるが、こちらからの質問によっては、そうした人も自分自身の経験に深く入っていく。海中に潜ってアワビや真珠をとってくる海女さんのように、自分の経験世界に潜っていく。そうした作業を助ける対話力というものがあるのだ。対話に参加している者が皆、自分自身の経験世界に碇^{いかり}を降ろし、一方で文脈の流れをつないでいる。それがコミュニケーションの優れた形なのである。

(齋藤孝著、コミュニケーション力、岩波新書、p 18-20)

設問 1

この文章に記述されている内容を要約しなさい。(300 字程度)

設問 2

この文章を読んで、看護に必要な「対話・対話力」について、あなたの考えを書きなさい。(300 字程度)